

Problem der Rudolf Hilferdings Theorie des organisierten Kapitalismus.(Bemerkungen zur Rede von Prof.W.Gottschalch im Symposium des Vereins für Hilferding, 10.November 1986.)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9967

ヒルファディング組織資本主義論の諸問題

—1986年11月10日の「ヒルファディングの会」シンポジウムでのW.Gottschalch教授の報告に対する一コメント—

上 条 勇

- (1) はじめに
- (2) ゴットシャルヒ教授とわが国のヒルファディング研究
- (3) ゴットシャルヒ教授の新たな問題提起
- (4) ヒルファディング組織資本主義論をめぐる私見
- (5) むすび

(1) はじめに

1986年10月末に黒滝正昭氏（宮城女子学院大学）の尽力により、アムステルダム大学のW. ゴットシャルヒ（W.Gottschalch）教授が来日された。教授は、ヒルファディングの「歴史の諸問題」、ファシズム論、組織資本主義論^{*}などにかんする報告を用意され、北海道、東京、名古屋、京都などの各地で精力的に講演してまわられた。私は、そのうち11月10日（月曜日）午後2時から慶応大学において「ヒルファディングの会」主催で開かれたゴットシャルヒ教授を招いてのシンポジウムに、大野英二氏（京都大学）と並んで一コメンターとして参加した。以下、シンポジウムについて簡単に紹介しておく。

まず、シンポジウムのテーマは、「組織資本主義論——ヒルファディングを中心に」である。各大学から約30名ほどの出席者をえ、飯田裕康氏（慶応大学）の挨拶・司会・通訳のもとにシンポジウムは和やかに進行した。次にゴットシャルヒ教授の報告を簡単に紹介しておく、それは①政策の変化、②組織資本主義^{**}における経済と政治、③組織資本主義概念の批判的評価の三つの構成からなっている。

第一の「政策の変化」ではゴットシャルヒ教授は、ヒルファディングが、

1918年に勃発したドイツ11月革命の挫折を受けてその政策を転換するにいたった経緯を取り上げている。教授によれば、ヒルファディングは、革命の挫折の原因をドイツ労働者層が革命的でなかったこと、むしろ体制順応傾向・改良志向にとらわれていたことに求めた。ヒルファディングは、このような事実直面して、これまでの彼の革命主義的な態度や希望を捨て、政治的諸与件と妥協し、民主主義への道を歩むにいたった。この点、ゴットシャルヒ教授は、社会主義を直接実現する機会を欠く以上、資本主義的民主主義を確保することは、それが他のどんな政治形態よりも労働運動に広い行動のスペースを与えるゆえに重要であったと述べている。そして、ヒルファディングが議会の機能上の有効性を過大評価し、議会外行動を過小評価したと批判する一方で、ヒルファディングの民主主義路線に一定の正当性を認めているようにみえる。

第二の「組織資本主義における経済と政治」ではゴットシャルヒ教授は、まず1915年の論文「諸階級の労働共同体？」においてヒルファディングがはじめて組織資本主義概念を提起したと指摘し、ドイツ革命挫折後についてはこう述べている。

すなわち、ヒルファディングは今や社会主義（遠い目標）の前段階として組織資本主義を語るようになり、ドイツ社会民主党の改良主義的实践に彼の理論を適用させるにいたった。1924年4月2日のカウツキー宛の手紙のなかでヒルファディングは、我々がプロレタリア階級に対する支配階級のイデオロギイ的影響力の強さを過小評価していたと反省する一方で、ドイツ労働者層が共和国と民主主義の価値をまだ十分に理解していないという不満をもらしている、と。

ゴットシャルヒ教授は、ヒルファディングのこの手紙の内容を知った今、当時のヒルファディングの政策がヴァイマル共和国の危うい民主主義の存在とそのなかでの社会民主党の政治行動の可能性を守るための必死な試みであったと理解せねばならないと告白している。そしてこう確認したうえで、ヒルファディングの組織資本主義論の要約的検討に移っている。要約はヒルファディングの論文「現代の諸問題」（1924年）、キール党大会での演説（1927年）、論文「現実的平和主義」（1924年）などのエッセンスを紹介する形で進められた。印象的な評価を行うならば、ゴットシャルヒ教授のこの要約は、教授の

かつての著書（後述）の第5章と内容の点ではほとんど変わってはいないように思われる。

最後の「組織資本主義概念の批判的評価」のところでは、ゴットシャルヒ教授は、歴史分析に組織資本主義概念を使用すべきことを提唱するJ. コッカやH. U-ヴェーラら西独の比較社会史グループの考えに対して否定的な評価を述べている。残念なことに、ここで教授は、時間の都合上、用意された報告原稿の最後の3ページを残して報告を終えられた。残り3ページは、今日の報告とかつての著書におけるヒルファディング評価との関連を述べ、さらに次の点で重要な内容を含んでいたといえる。すなわち、教授は、ヒルファディングがドイツ労働運動に幻想をもたず、当時のきびしい現実のなかで、社会民主党の歩むべき道を示すためにシスュフォスの努力をせざるをえなかった、かれが組織資本主義論というまったく誤った理論を唱えたのも、党理論家として奉仕するために目が曇らされたからだとして述べている。私の用意したコメントは、この部分を大きく取り上げたものであり、最後の3ページを残して教授が報告を中断されたのは、時間の都合とはいえいささか残念であった。

さて、ゴットシャルヒ教授の報告を受けて、大野英二氏と私がコメントを行うことになった。大野英二氏は、主として、ヴェーラたち西独の比較社会史グループの見解を擁護する観点から、ゴットシャルヒ教授の報告に批判を加えられ、さらにヒルファディングの組織資本主義論については、政治的「多価」を認めず、経済決定論に陥っているという否定的評価を述べられた。続いて私はまず、西欧とは異なり日本ではなぜヒルファディングにかんする関心が高いのか、というゴットシャルヒ教授の質問にこう答えた。すなわち、その理由は、日本においてマルクス主義研究が盛んなことにあり、その一環として帝国主義論・現代資本主義論研究においてヒルファディングに重要な位置づけが与えられていることにある、と。こう答えた後私は、時間の制約上（コメントの持ち時間が幾分短縮されたので）、ドイツ労働運動とヒルファディングの関係にかんするゴットシャルヒ教授の新たな問題提起に的をしぼってコメントした。そしてこの点で教授の見解に共感を示した上で、進んではこの角度からヒルファディングの組織資本主義論の理論的性格をも説明す

べきであろうと主張した。私は、用意したコメントの原稿では、さらにヒルファディングの組織資本主義論にみるべきものがあることを強調しておいたが、これは時間の都合上残念ながら割愛せざるをえなかった。

その後、シンポジウムは、大野氏と私のコメントにたいするゴットシャルヒ教授の答えをいただいた後、質疑討論に移った。河野裕康(金城短期大学) 飯田裕康、相田慎一(専修大学北海道短大) 氏らが質問に立ったが、言語の障害上、残念ながら議論が噛み合わない面もみられた。シンポジウムは午後6時過ぎまでなされ、有意義な成果をえて成功裡に終わった。

なお、小稿は、このシンポジウムのために用意した私のコメント原稿を、注記の追加や誤記の訂正それに若干の技術上の修正をほどこしたうえで公表するものである。

* ゴットシャルヒ教授は、「ヒルファディングの組織資本主義論」(Rudolf Hilferdings Theorie des organisierten Kapitalismus) という報告原稿を用意された。以下、私のコメント原稿では、それからの引用等については本文中にページ数のみを示すことにする。

** 「組織資本主義」は、organisierte Kapitalismus の訳語である。私は経済学史・思想史の立場を強調して、ヒルファディングの所論については、通例「組織された資本主義」という訳語を使用することになっているが、シンポジウムでは特別に「組織資本主義」という言葉を用いることにしたい。もちろん便宜的な理由からのみにすぎない。

(2) ゴットシャルヒ教授とわが国のヒルファディング研究

1970年代から1980年代はじめにかけて、わが国ではヒルファディング研究が活発になされ、ヒルファディング・ルネッサンスとっていい状況が生まれた。わが国におけるこのヒルファディング研究に大きな刺激を与えたのは、ゴットシャルヒ教授の著書、*Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, 1962 (保住敏彦・西尾共子訳『ヒルファディング』ミネルヴァ書房、1973年)であ

った。この著書は、ヒルファディングの全生涯にわたる経済・政治・社会理論を詳細に検討した点で画期的であった。ゴットシャルヒ教授の話では、出版当時この著書は、ヨーロッパではあまり注目をあびなかったとのことである。しかしわが国では違っていた。すでに1965年に今野登氏が教授の著書のわが国への紹介を試みている(「西ドイツにおけるヒルファディング研究——一つの紹介」『武蔵大論集』第13巻第1・2号)。そして1973年には保住敏彦氏らの手によって教授の著書の翻訳の発表が企てられたのである。わが国におけるヒルファディング研究は、その後『金融資本論』研究を深める道をたどる一方で、教授の研究の影響などを受けつつ、『金融資本論』成立前史や『金融資本論』以後のヒルファディングの検討など包括的な関心のもとに進められてきた。

ところで1960年代末から今日にいたるまで、マルクス主義の再評価と西独の比較社会史研究における「組織資本主義」概念の使用を背景にしてヒルファディングにかんする関心もヨーロッパである程度高まっているという。1981年にボットモア(Bottomore)らによって『金融資本論』の英語版が出版されたのもその一環としてみることができる。ヨーロッパでのこのような動きは、教授のヒルファディング研究の先見の明、そしてこの研究に注目したわが国の誇りうべき立場を示すものであるとあってよい。

このような背景のもとに、この度黒滝正昭氏の尽力により、ゴットシャルヒ教授をわが国に迎え、こうして教授を囲んだシンポジウムを「ヒルファディングの会」主催で開くことができたのは、我々にとって望外の喜びである。今日は教授に「組織資本主義論——ヒルファディングを中心にして」というテーマで報告していただいた。以下、教授の報告にそって、ヒルファディングの組織資本主義論の諸論点についてコメントをつけくわえておきたい。

(3) ゴットシャルヒ教授の新たな問題提起

前掲の著書の第5章「『組織資本主義』における社会民主党」においてゴットシャルヒ教授は、すでにヒルファディングの組織資本主義論の詳細な検討を試みている。この章は、①組織資本主義——社会主義の前段階、②現実的平和主義、③労働者階級と民主主義国家という3つの節からなる。ここでは

この著書における教授の見解を立ち入って紹介することはできない。結論的にのみ述べておくと、教授は、第一に、独占が競争を排除するものではないという観点から、組織資本主義の「調和主義的」ヴィジョンを批判している。第二に、「現実的平和主義」については、ヒルファディングが「国家間の競争を激化」する資本主義的傾向やドイツの帝国主義的、民族社会主義的傾向を軽視ないし過小評価した点を批判し、かれの理論が理想としてはともかく「政治的現実にはふさわしくなかった」と指摘している。第三に、教授は、国家の中立性と政党政治の意義を述べるヒルファディングの「民主国家」論に対して、ヴァイマル民主主義の脆弱性や欠陥を強調し、また、企業家層の経済的支配のもとでは民主主義が形骸化し、「形式民主主義」にならざるをえないとする観点から批判を企てている。教授は、結局、ヒルファディングの組織資本主義論の「調和主義的」で「改良主義的」な性格を指摘し、概してこの理論を否定的に評価している。この点、反ファシズム闘争に関連して、教授は次のように述べている。

「かれは〔ヒルファディング〕はその組織資本主義観のために、世界経済恐慌の政治的結末を十分早いうちに認識することができなかつたし、また形式民主主義と実質民主主義とを同一視したために、政治と経済、国家権力と経済力との関係を見誤った。」²⁾

前掲書におけるゴットシャルヒ教授の見解は以上のように整理できる。この見解に対して今日の教授の報告の新たな特徴はどこにみられるのだろうか。以下、この点、簡単に述べたい。

まず最初に組織資本主義論そのものに対するゴットシャルヒ教授の否定的評価は、今日の報告においても基本的には変わっていないことを確認しておきたい。教授自身も報告のなかで、ヒルファディング組織資本主義論とこの時期における社会民主主義的政策の可能性に関するかつての自分の批判を訂正する必要を殆ど感じていないと述べている（S. 21）。ただ教授が訂正したのは、パウル・レヴィの次の見解に関する評価である。すなわち、パウル・レヴィは、野党の立場に立ち、階級闘争を仮借なく展開していたならば、社会民主党が恐慌時にも大衆から孤立せず民主主義共和国を救いえたであろうと主張した。教授は、レヴィのこの左翼的主張が正当であったとかつ

て評価していた。³⁾今日の報告では教授は、レヴィのこの左翼的政策も、統一の労働運動の断固とした支持という前提を欠き、現実には成功しえなかったろうと述べるにいたっている(S. 21)。前掲の著書では、教授は、概して左翼の立場を正当とする観点に立ち、組織資本主義論当時のヒルファディングの改良主義的立場を批判する見地に立っていた。レヴィに対する評価の上述の修正は、この点に関して、教授の立場の微妙な変化を示していると思われる。これについては後述したい。

さて、ヒルファディングの組織資本主義論に対する如上の否定的評価は、ヴェーラー、コッカ、ヴィンクラール西独の比較社会史グループの問題提起に対するゴットシャルヒ教授の回答も基本的に規定していると思われる。わが国ではとりわけ大野英二氏によって熱心に紹介されているように、ヴェーラーたちは、比較社会史研究において組織資本主義概念を積極的に用いることを提唱した。大野氏は、このヴェーラーたちの見解に関して、ヒルファディングとは異なり経済決定論から免れ、政治的「多価」を認めたとして、肯定的に評価している。それに対してゴットシャルヒ教授は、そもそも組織資本主義という用語を用いることそのものに反対している。教授は、その理由として、組織資本主義概念がやはり資本主義の発展を調和的に捉える傾向をもち、この点でヒルファディングの誤りを免れえないということを挙げている。教授は、このマイナスのイメージをもつ組織資本主義概念に対して、「集産的資本主義」(Kollektiver Kapitalismus)あるいは「協同的資本主義」(Koroperativer Kapitalismus)という用語を使用することを提唱している(17~20)。ここではあたかも用語上の問題が争われているように思える。

以上、ゴットシャルヒ教授は、ヒルファディングの組織資本主義論そのものに対して後にも先にも否定的に評価しており、ヴェーラーたちに対して組織資本主義概念を使用すること自体にも反対している。それでは、今日の教授の報告の新しい主張点はどこにみられるであろうか。単刀直入に言ってそれは主として、ドイツ労働運動とヒルファディングのかかわり方に関する教授の評価にあるように思われる。

今日の報告書の最初の方でゴットシャルヒ教授は、ドイツ11月革命(教授の表現を用いれば「未完の革命」)の挫折がヒルファディングにとって革命へ

の希望の終わりを意味したと述べている。労働者の圧倒的多数は、右翼社会主義者に従った。ドイツ労働者層は、革命的でないことが示された。これに失望したヒルファディングは、当時の政治的与件に従い、改良主義への道を歩みはじめた。ヒルファディングが状況の変化に応じて革命主義から改良主義に政治路線を転換したと指摘する点では、教授の主張は、前掲の著書におけるのと同じである。違いは、第一に、教授がドイツ労働者階級の改良志向的・体制順応的な態度、その政治的未熟さをより強調していることにあるように思われる。この点、教授は、ドイツ労働運動の改良主義的傾向に合わせて自ら改良主義への道を歩むにいたったヒルファディングに同情さえ示しているといえる。第二に、教授は、「未完の革命」後民主主義の路線を歩んだヒルファディングの態度に一定程度正当性を認めている。この点、教授はこう述べる。すなわち、長い間民主主義的社会主義を実現するチャンスがない限りまず資本主義的民主主義を確保することが肝要であった。民主主義は、疑いもなく、資本主義的所有関係の基礎の上で、他のどんな国家形態よりも労働運動に広い行動の枠を与える。この民主主義に対してブルジョア諸層の支持を獲得することは、重要な課題であった。が、これはドイツにおいて決して容易なことではなかった、と。

教授のこの見解は前掲の著書でははっきりと示されていなかったものである。むしろ、著書では、(議会制)民主主義に対する教授の不信の念の方が前面に押し出されていたと見受けられる。それとは異なり、今日の報告では教授は、ヴァイマル期におけるヒルファディングの民主主義的路線をある程度評価するにいたった。とすれば、教授はさらに進んで、当面社会主義を実現するチャンスのないヴァイマル期におけるヒルファディングの改良路線(経済民主主義)の一定の正当性を認めざるをえなくなるのではないか。教授は、勿論、ヴァイマル共和国の基盤の脆弱さに対する認識、それと議会外行動の意義の過小評価の点でヒルファディングの考えに欠陥があったことを指摘している。ナチズムの勝利は、結局ヒルファディングの政治的見通しが甘かったことを示している。とはいえ、教授も言及しているように、ヒルファディングは、ヴァイマル民主主義の欠陥や脆弱性のある程度認識していた。私見では、このことを認識した上でヒルファディングは、社会主義への革命的道

が破綻したと判断した以上、否応なしに民主主義の道を歩まざるをえなかった。かれは、ヴァイマル民主主義が欠陥に満ちたものであっても、それを評論家的に批判したり、見捨てたりすることはできなかった。だから、余計に民主主義の支柱として労働運動の力に頼ったり、民主主義教育の意義を強調したのである。かれは、見通しが結局のところ甘かったとはいえ、この点であまり幻想をいだいてはいなかったと思われる。かれは、労働者大衆の体制順応傾向についても幻想をいだいてはいなかった。むしろ、この事実を前提にして、民主主義の道を歩み、改良闘争を通じて労働運動を訓練することに改めて社会主義への道を見出そうとした。報告のなかでは教授は、ヒルファディングがかなり醒めた目でドイツ労働運動をみつめながら、シスユフォスの努力をせざるをえなかった事実を浮き彫りにしている（S. 8f, S. 23 f.）。

教授のこの説明は、左翼的な立場を無条件に正当視し、この観点から政治史や政治運動を論断することを我々に戒めているようにみえる。私見では改良主義的と思われたヒルファディングの経済民主主義路線にも、当時の状況下で一片の真理がみられるのだ。ヒルファディングは、時代の閉塞状況のなかで、ドイツ労働運動の発展を期待し、ドイツ労働運動の経済民主主義運動の展開に社会主義の希望をみた。そして社会主義者としてかれはこう希望するより他はなかった。この希望が甘く、満たされないものであったことは、歴史的事実としてはっきりしている。しかし、批判することはたやすい。今日我々は、先進資本主義国において、ヒルファディングの当面したのと類似した状況にたたされてはいないだろうか。先進国における社会変革は、目下のところ、民主主義と社会改良を通じて漸次的に達成されるより他はない。この点でそれは、ヒルファディングの経済民主主義路線から多くの教訓をくみとるべきであろう。そして、この点では教授と私の考えが一致しうものと思われるのである。ただ、私は、この確認から一歩進んで、この角度からヒルファディングの組織資本主義論も特徴づけてみたいと考える。以下、このことを含めて、ヒルファディング組織資本主義論に対する私の評価を参考までに述べておきたい。

(4) ヒルファディング組織資本主義論をめぐる私見

ヒルファディングの組織資本主義論は、いうまでもなく資本主義の枠内で生産の無政府性が除去されうると述べ、ゴットシャルヒ教授も指摘しているように、資本主義の「調和的」発展を示すものであった。この点、これまで独占が競争を排除するものではなく、独占による個別的組織化の試みが社会全体において不合理で矛盾に満ちた結果を生み、結局恐慌を止揚するものではなく、その形態変化をもたらすにすぎないという観点から、ヒルファディング批判が試みられてきた。この批判は、その限りではまったく正しく、これにつけくわえることはない。そうであるとすれば、ここで改めてヒルファディングの組織資本主義論を取り上げる意義はどこにあるのだろうか。次に、この点、思いつくままに述べていきたい。

① まず帝国主義論史においてヒルファディングを評価するためには、彼の組織資本主義論の検討が不可欠であるということが思い浮かぶ。我々は、この点、組織資本主義論から逆照射することが『金融資本論』の理論的性格の重要な側面を浮き彫りにするという事実を看過しえない。ゴットシャルヒ教授も指摘しているように、『金融資本論』には、「総カルテル」論など組織資本主義の萌芽や基盤となるような叙述が含まれている。問題は『金融資本論』において組織資本主義論風の叙述がいかなる意味をもち、どう位置づけられるかということにある。これに関して、大きく分けて三つの解釈が考えられる。第一に、『金融資本論』を殆ど組織資本主義論と同等とみなすか、組織資本主義論に引きつけてその特徴を理解する見解である。第二に、『金融資本論』解釈において組織資本主義論風の叙述をとるに足らない誤りとみなし、これを取り上げる意味をあまり認めない考えである。第三に、『金融資本論』の組織資本主義論的叙述にヒルファディングの消極的側面を見出し、『金融資本論』を消極的側面と積極的側面の二つに分けて解釈する立場もある。私は、これらに見解に対してこう考える。ヒルファディングの組織資本主義論は、①経済民主主義②組織資本主義③現実的平和主義の三つの柱からなるとみられる。このうち、組織資本主義は、『金融資本論』におけるいわば「組織化論的視角」——この特徴づけはエルスナーらの「流通主義」という断定的批判とは区別されるが、ゴットシャルヒ教授が前掲書で「流通主義」批判の観点からヒルファディ

ングの組織資本主義論風の叙述を説明しているのには、多少疑問が残る——に⁸⁾すでにその理論的基盤を与えられていた。また、現実的平和主義についていえば、その萌芽はすでに『金融資本論』第5篇の金融資本の経済政策論において見出される。組織資本主義論風の叙述は、『金融資本論』において思ったより重要な位置を占める。といっても『金融資本論』を組織資本主義論と同一視することはできない。また、組織資本主義＝消極的側面、金融資本による帝国主義分析＝積極的側面と機械的に分離して『金融資本論』を評価する姿勢にも疑念が残る。この点、我々は、両側面を統一的に理解するべきであろう。私は、この見地に立って、『金融資本論』第4篇の恐慌論においてヒルファディングが「総カルテル」の現実性を否定していることに注目したい。ヒルファディングは、ここで資本主義の組織化傾向に限界を画し、歯止めをかけ、組織資本主義を現実には到来しえない抽象的理論的仮定であるとみなすことによって、『金融資本論』では当時の帝国主義の現実を金融資本概念に基づきリアルに分析し、帝国主義戦争との関連で社会主義の左翼の展望を導きだした。そして、その際、その限界を画したとはいえ、資本主義の組織化の進展に、社会主義の物質的組織的前提条件の準備を見出したのである。

② 如上の『金融資本論』に関する評価に基づき、組織資本主義の形成過程を詳細に検討することは、たんなる帝国主義論史の枠を越えたヒルファディングの学説史・思想的評価において、重要であろう。ゴットシャルヒ教授が指摘しているように、ヒルファディングが組織資本主義という言葉をはじめて用いたのは、1915年の「諸階級の労働共同体？」という論文において⁵⁾であった。彼が組織資本主義の到来の現実的可能性を認めるにいたった理由は何であったのか？それは、戦時統制経済による資本主義の著しい組織化と、労働者大衆の体制順応傾向や改良志向を背景として勝利した日和見主義的SPD指導部による戦争協力にあった。これらの事実直面してヒルファディングは、もしも労働者大衆が戦後も体制順応傾向と改良志向からぬけなかった場合には、組織資本主義の到来もありうると考えた。かれは、このとき戦争の結果として労働者大衆が急進化・革命化することを期待して、組織資本主義か民主主義的社会主義かといった二者択一の形で戦後の社会発展の方向を展望したのであった。ドイツ11月革命の勃発は、この二者択一の判定

が社会主義の方に下されたかのように思わせた。ヒルファディングは、こうして社会化運動を積極的に指導していった。が、社会化運動が挫折したとき、ヒルファディングは、「資本主義の危機→革命」という立場を放棄し、民主主義の道を通じた改良運動の積み重ねに社会主義の実現を期待するようになり、これとの関連で組織資本主義論を唱えたのである。この経緯は、ゴットシャルヒ教授も明らかにしていることである。

ここで私は、労働者大衆の体制順応傾向・改良志向に直面したことが、組織資本主義と経済民主主義へのヒルファディングの転換に大きな役割を果たしたことに注目したい。『金融資本論』執筆の時点ではヒルファディングは、資本主義と労働運動の高度な発展の結果、労働運動が資本家から改良的譲歩をえる機会が僅少になるという事実を指摘し、この事実こそが、改良主義・修正主義から基盤を奪い、労働者階級を革命化するものであるという認識を示していた。その際彼は、改良闘争の教育的効果を認めたと、改良的成果を積極的に獲得すること自体にはそれほど意義を見出さなかった。むしろ、帝国主義の諸矛盾の結果、一気に社会主義革命の時代が到来すると考えたのである。彼の組織資本主義論への転換は、彼のかかる革命的構想の挫折の結果でもあった。そしてその際、上述のごとく、労働運動の体制順応傾向・改良志向が、決定的誘因をなしたのである。戦時中のある論文のなかで、この点ヒルファディングはこう述べている。すなわち、マルクスは、『資本論』において、資本主義の発展の将来を天才的に予見した。しかし彼は、労働者階級が労働運動を展開し、自らの生活や社会的地位を改善しているうちに、資本主義体制に順応する傾向をもつにいたることは見通せなかった、と。

彼は、11月革命の挫折後、労働運動のこの体制順応傾向に対して、それを高踏的に批判するのではなく、彼自身労働運動のこの水準に一度立って考え、改良運動を展開し、資本主義を構造的に改革していくことに社会主義の新たな展望を見出した。その際彼は、社会改良が労働者大衆に対する体制内統合化作用をもつことを意識していた。だが、社会改良のこのような保守的作用に対して、資本主義を構造的に改革し、労働者大衆の文化教育水準を高め、かくして客観的にも主体的にも社会主義への道を準備する効果をも改良運動に期待したのである。これが彼の経済民主主義論の真意であった。(したがっ

て彼の経済民主主義に「敗北主義的改良主義」を見出す池上惇氏の所説は、⁷⁾疑問である。)私は、この点、ドイツ労働運動の体制順応傾向に直面し、民主主義と改良の道に転換せざるをえなかったヒルファディングに理解を示すゴットシャルヒ教授の見解に共感を覚える。当時ヒルファディングは極めて不利な状況に置かれていた。戦勝諸国によるベルサイユ体制の押しつけは、ドイツ資本主義にとって資本の蓄積条件を非常に不安定なものにした。ヴァイマル民主主義は、脆弱で欠陥に満ちたものであった。ドイツ労働運動は、体制内に統合化される傾向をもっていた。ヒルファディングは、これらの事実をかなりの程度認識意識していた。にもかかわらず、かつての革命的構想が挫折した今、ヒルファディングは、これらの不利な諸条件のもとで、民主主義と改良の道を歩むしかなかった。ゴットシャルヒ教授が指摘しているように、それはシスュフォスの苦役にも似た作業であった。ヒルファディングは、これらの困難を一挙に解決するものとして、組織資本主義への発展傾向に期待した。この角度から、以下、少し彼の組織資本主義論の特徴をみておこう。

ヒルファディングの組織資本主義論は最初、資本主義のいわゆる「相対的安定期」の現実の分析から導き出されたというよりは、敗戦国ドイツの悲惨な現実のなかで、ドイツの組織労働運動に戦後経済再建へのかかわり方と改良運動（経済民主主義運動）の可能性を示すために、彼の「組織化視角」に基づき理論的な予測として唱えられた。民主主義と改良の道を進め、この観点から戦後ドイツの経済再建に労働運動がかかわるにあたって、資本主義の均衡的な発展が当時もなお可能であると示すことは、ヒルファディングにとって是非とも必要なことであつた。⁸⁾彼は、組織資本主義論をこれに役立てたといえる。⁹⁾「相対的安定期」の彼の論文や演説を検討すると奇妙な事実につづかる。つまり、組織資本主義論を唱えたにもかかわらず、ヒルファディングは当時の経済的現実を決して「調和的」・「楽観的」に捉えていない。むしろ、ドイツ資本主義の直面した経済的諸困難、経済恐慌の危険性を絶えず強調していたのである。1924年の論文「現代の諸問題」においては、彼は、第一次大戦以来当時の世界が「経済的にも政治的にもそして精神的にも均衡を取り戻してはなく」、「破滅し、すべてが打ち砕かれた時代」に当面していると述

10) べていた。ヒルファディングがドイツ資本主義の再建に確信をもち、組織資本主義の時代の到来を確言したのは、1927年のいわゆるキール党大会での彼の演説のことである。こうした事実、ヒルファディングの組織資本主義論に対する我々のイメージをある程度修正する必要性を示している。これまで彼の組織資本主義論は、資本主義の発展に関する楽観的・調和的でどうしようもない改良主義的な理論であると思われてきた。しかし、それは、実際は、労働者大衆の体制順応傾向と敗戦国ドイツの悲惨な現実を認め、これらを前提にして、体制内に統合化された労働運動を社会変革へと導くのは改良と民主主義の道しかないと考え、そのための理論的指針として、国家や労働運動による資本主義のコントロールと経済発展の可能性を示したものであった。我々は、ヒルファディングと似たような立場に現代も立たされることがある。すなわち、現実の問題として、労働運動や社会主義運動が資本主義の「危機」を社会主義的変革によって一気に解決しえない場面に直面することがある。この場面では、労働運動・社会主義運動は、労働者や国民の生活の防衛や改善を目的にして、政策的代案を提出せざるをえず、そのためには資本主義の枠内で改革を目指しつつ経済再建や経済発展の方途を示さざるを得ない。労働運動は、危機的経済状況に対する経済再建策の提起を強いられ、種々の矛盾をはらみ、結局は管理しきれない資本主義の社会的管理を余儀なくされる。これは、改良志向型の社会主義運動のジレンマを意味している。ヒルファディングの組織資本主義論は、先進国に特有な社会主義運動の当面する固有のジレンマを先取りしたものであり、このジレンマに直面して打ち出されたヒルファディングなりの解決策であったといえる。ヒルファディングは、彼の「組織化視角」を持ち出すことによって、このジレンマから何とかして逃れようとし、ついには大不況にあって挫折してしまうのである。しかし、我々はヒルファディングの失敗を笑うことはできない。問題は、我々自身におも残されているのである。ゴットシャルヒ教授の今日の報告における問題提起は、この事実の確認へと突き進む方向性を我々に示していないだろうか？¹¹⁾

③ 以上、ヒルファディングの組織資本主義論には、調和主義的で改良主義的な理論だと超越的に批判して済ましえない問題が含まれていることがわかった。私は、このことの確認からさらに進んで、「相対的安定期」の一資本

主義論としてのかれの組織資本主義論の具体的性格にも少し言及しておかなければならない。

この点、確かにヒルファディングの組織資本主義論は、資本主義の調和的な発展像を示す性格をもっている。しかし、私は、このことにマイナスの面のみをみるのではなく、次のことをも強調しておきたい。

すなわち、戦間期の資本主義は、戦勝国による世界平和体制のもとで、資本の蓄積条件にとってきわめて不安定な構図つまり「危機」の様相を示していた。この点で、資本主義がもはや発展の動力を失い、没落の一途をたどっているといったコミンテルン流の危機論（全般的危機論へと発展してゆく）が妥当であるように思われた。しかし、戦間期資本主義は、他方では、新たな民主国家の形成、労働運動の影響力の増大、種々の社会改良の実現による新たな労資関係の形成（労資同権的方向を含む）、新中間層の増大、化学・電機・自動車などの産業部門で新たな技術的生産力的発展の可能性などの方向も示しはじめていた。ヒルファディングの組織資本主義論は、資本主義の発展を強調するその性格の結果、資本主義のこうした方向性なり可能性を多少先取りの捉えることができた、と。

ヒルファディングの組織資本主義論には、この他にもいくつかの注目すべき論点が含まれている。たとえば、加藤栄一氏が主張しているように¹²⁾、労資同権の角度からの国家の経済介入や資本主義の組織化にかんするヒルファディングの指摘は、現代資本主義論において考慮に値する重要な問題提起を含んでいるといえる。また、資本主義の上部構造として様々な政治形態が可能であると述べ、政治の相対的自立性を強調しつつ、世界平和の可能性を探ったかれの「現実的平和主義」論には、経済政策論の関心からみるべきものが多い。（私は、この点、ヒルファディングの組織資本主義論が経済決定論に陥り、政治的「多価」を認めなかったという大野英二氏の評価が的を射ていないと思う¹³⁾）細かい論点を挙げればきりがないので、最後に組織化論の問題に的を絞って私見を述べておきたい。

ヒルファディングの組織化論については、これまで、「国家による組織化という問題についての明確な方法上の意識が……なかった」（大内秀明氏¹⁴⁾）、「経済の組織化過程そのものにおいて国家に独自の役割が与えられていない」

(加藤栄一¹⁵⁾氏)という批判がなされている。果たしてヒルファディングは、国家による組織化の問題を無視したのだろうか？私はそうは思わない。

通例ヒルファディングの組織資本主義論は、『金融資本論』のなかで描かれた「貨幣なき社会」の抽象的なイメージで論難される傾向がある。しかし、戦間期の組織資本主義論は、当時の現実に対応して貨幣も価格もある社会を描いているのみでなく、生産の無政府性を述べたとき、恐慌や景気変動がまったく解消するとは主張してはいない。その内容はもう少し控え目である。むしろ、トラストの投資政策や大銀行の信用政策、それに「中央銀行の的確な貨幣政策」によって、恐慌が緩和され、景気循環の波がゆるやかになることを強調しているにすぎない¹⁶⁾。これについては、ゴットシャルヒ教授もまとめられるが、問題は、その意味の解釈にある。これまで、その深い意味については殆ど考えられてこなかった。それに対して私は、ここで述べられたヒルファディングの組織化論が、恐慌の激成的性格の解消を述べた『金融資本論』の「恐慌の形態変化」論に近い内容を示していること、それにヒルファディングが中央銀行の通貨政策の役割を強調していることに注目したい。私は、この点、ヒルファディングが金融資本による経済の私的組織化と国家的機関による信用・通貨調整（公的組織化）が相呼応して、景気のコントロールを達成しうると考えたのだと解釈する。先にも述べたように、ヒルファディングは、当時のドイツ経済の悲惨で不安定な状態をよく認識していた。かれにあっては、戦後ドイツの経済再建が問題であった。だから、理論的には金融資本による組織化の限りなき前進を述べていたヒルファディングも、当時の現実にそくして国家による経済の組織化の促進を考えざるをえなかった。かれはすでに社会化論争のときに、「組織化傾向を、上から、なんらかの機関によって資本家と協力して幾分でも助長し、促進することは可能である¹⁷⁾」と指摘していた。そして「相対的安定期」には、①国家による労資関係の調整、②中央銀行による信用・通貨調整、③国民的な合理化運動の展開、④石炭産業やカリ産業における価格決定への国家の介入などに、国家による経済の組織化の促進をみたのである。

ヒルファディングの組織化論は、このように、公私による組織化の結果景気をコントロールしうると述べたもので、現代資本主義論の一元流をなす考

えを示すものであった。それは通例考えられているようにそれほど荒唐無稽であったわけではない。もちろん、それが資本主義的組織化をあまりにも「調和的」に描いていたことは否定できない。資本主義的組織化は実際は不合理で矛盾に満ちたものであり、社会全体からみれば著しくバランスの欠いたものである。この事実を無視した点でヒルファディングの組織化論は、重大な欠陥をかかえていた。しかし他方で、現代資本主義において、資本主義の組織化・計画化・社会化は高度に進展しており、これらについて述べること自体は誤ってはいない。むしろ、矛盾や不均衡をかかえながら、資本主義がどこまで矛盾を拡散させる形で景気や経済をコントロールしうるか、経済諸組織の運動と政治諸組織の運動の相互浸透がいかなる形で進行するかを究明することは、現代資本主義論の重要な課題をなしている。その意味で、私は、保住敏彦氏の次のような指摘に賛同しうる。

「ヴァイマル共和国期ないし現代のように、国家の経済政策や大経済組織の計画的行動によって、資本主義経済の矛盾が慢性的に散在的に現れてくる状況にあつては、第一次大戦後ヒルファディングやナフタリが發展させた組織資本主義論にみられるような、大経済組織（独占的資本家組織、労働者組織等）の経済や政治に及ぼす影響に関する理論は……現代資本主義の構造や運動を解明するためには、検討されるに値する内容を含んでいるのではない¹⁸⁾だろうか。」

(5) む す び

以上、ゴットシャルヒ教授の報告にコメントを加え、あわせて私見を述べてきた。小括すると、ゴットシャルヒ教授は、今日の報告では、ヒルファディングにかんする以前の著書と同様に、ヒルファディングの組織資本主義論そのものについては否定的に評価しているが、ドイツ労働運動や民主主義に対するヒルファディングの対応については、新たな理解や問題提起を示していると解することができる。私は、ドイツ労働運動とヒルファディングのかわりになど関する教授の評価にかなり共鳴しうる。そして、この角度からヒルファディングの組織資本主義論の特徴をさらに深く読み取るべきであると思うのである。しかし他方では、組織資本主義の「調和主義的」傾向を指

摘することによってヒルファディング組織資本主義論を全く否定的に評価する教授の考えには少し疑念が残るといわざるをえない。私はこの疑念を明確にするために、コメントの範囲を多少越えて、私見を簡単に述べておいた。¹⁹⁾最後に、研究上の多くの刺激を我々に与えていただいたことで、ゴットシャルヒ教授に改めて感謝の意を表したい。

- 1) Rudolf Hilferding, *Finance Capital*, edited with an Introduction by Tom Bottomore, Routledge & Kegan Paul, London, Boston and Henley 1981.
- 2) Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politische Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, Duncker & Humblot, Berlin 1962, S. 224. 保住・西尾, 前掲訳, 225ページ。
- 3) Ebenda, S. 217f. 同上訳, 215ページ。
- 4) Ebenda, S. 103f. 同上訳, 78~79ページ。
- 5) Rudolf Hilferding, *Arbeitsgemeinschaft der Klassen?*, in: *der Kampf*, Jg. 8, 1915, S. 322.
- 6) Ebenda, S. 321f.
- 7) 池上惇『国家独占資本主義論争』青木書店, 1977年, 140, 143ページ。
- 8) この点, 当時のヒルファディングには, 恐慌や不況が, 労働者の心理的革命化をもたらす一方で, 組織労働運動の力を弱め, 逆に経済的繁栄が組織労働運動の運動基盤を強化するという考えがあったといえる。
- 9) ゴットシャルヒ教授は, ヒルファディングが組織資本主義論という「調和主義的」理論に転換するにいたった理由を政治主義的側面に見出し, 次のように述べている。すなわち, ヒルファディングが, ドイツ社会民主党の政治家としてその路線に妥協しようとしたことが, 彼の理論的分析力を曇らせ, 組織資本主義論を唱えるにいたらせた, と。シンポジウムでは, 河野裕康氏が, ゴットシャルヒ教授のこの見解に対して, ヒルファディングが組織資本主義論を唱えるにいたった理由は彼の経済理論のなかに見出されるのではないかと疑念をていしている。
- 10) Rudolf Hilferding, *Probleme der Zeit*, in: *Die Gesellschaft*, Jg. 1, Bd. 1, 1924, S. 1, S. 17. ヒルファディング『現代資本主義論』倉田稔・上条勇編訳, 新評論, 1983年, 64, 81ページ。

- 11) 残念ながらゴットシャルヒ教授の認識は、この方向に進んでいるとはうかがわれなかった。すなわち、教授は、ドイツ労働運動の体制順応傾向・改良志向に応じて（議会制）民主主義の道に転換せざるをえなかったヒルファディングに一定の同情を示す一方で、その結果として唱えられた組織資本主義論に対しては政治主義的理由から提起された否定的な理論にすぎないと批判するにとどまっている。
- 12) 加藤栄一「組織資本主義と現代資本主義」（『経済評論』第28巻第7号、1979年7月）および「〈シンポジウム〉国家独占資本主義と現代資本主義」（『現代と思想』No.36、1979年6月）における同氏の発言を参照。
- 13) 「〈対談〉組織資本主義の地平」（『経済評論』第30巻第1号、1981年1月）10～13ページ。
- 14) 「〈対談〉現代資本主義とマルクス主義」（『経済評論』第28巻第7号、1979年7月）、15～16ページ。
- 15) 加藤栄一、同上論文、56～57ページ。
- 16) Rudolf Hilferding, Probleme der Zeit, S. 2. 倉田・上条前掲編訳、65ページ。
- 17) Rudolf Hilferding, Die Sozialisierung und die Machtverhältnisse der Klassen, Referat auf dem 5. Oktober 1920, Berlin 1920, S. 8. 倉田・上条前掲編訳、42ページ。
- 18) 保住敏彦『ヒルファディングの経済理論』梓出版社、1984年、261ページ。
- 19) 詳しくは拙稿「ヒルファディング『組織された資本主義』論再考——その学説的評価のために」（『金沢大学教養部論集・人文科学篇』24-1、1986年）を参照されたい。